

# 死生学

DALS ニュースレター No.14

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

*Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life*

2006年7月10日

## 目次

巻頭エッセイ：動物の深淵、人間の孤独

西村 清和

エッセイ：魂の大きさ

竹下 政孝

書評：西平直『教育人間学のために』

秋山 茂幸

### ●研究会・シンポジウム報告●

シンポジウム「生死を超えて」を終えて

末木 文美士

Nick Zangwill 博士講演研究会報告

一ノ瀬 正樹

駒場美術博物館特別展「聖書に生きる：トーラーの成立からユダヤ教へ」

市川 裕

### ●今後の予定●

Batnitzky 教授講演会

市川 裕

ヴェレス教授講演会「不治の病をこえて生きる」

島菌 進

ワークショップ「死生の社会学」予告

武川 正吾

チュービンゲン・トゥルーズ研修・研究会議

島菌 進

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

## 動物の深淵、人間の孤独

西村 清和（本研究科教授・美学藝術学）

このニューズレターの前号（No.13、4月10日）で同僚の一ノ瀬正樹さんが、「哲学者の顔」という一文をよせている。それによれば、動物、なかでも犬こそはわれわれ人間をまっすぐに見つめ、一点のくもりもない目線でわれわれの心を見すえ、われわれを射抜くのだが、それはかれらが「この世界に生きるという、善でも悪でもないそのままの実在性をたんに存在している」からであり、「そのことによって人間に哲学者の顔を知らしめている」という。一ノ瀬さんは、これは「けっして自分の愛犬を溺愛する親ばかの言説ではない」といわれるが、わたしのように少年時代からいままで犬や猫と過ごした経験をもたないものにとっては、これはやはりいかにも愛犬家の犬に対する特別な想いとひびくのであり、その点に羨ましささえ感じるのである。

犬たち、あるいは自然の動物たちの、われわれ人間をまっすぐに見つめ射抜くあの善悪をこえた目線は、果たして世界の裸の存在を見すえる哲学者のまなざしなのだろうか、それともかれらの目線は、ついにわれわれ人間のうかがい知れないある深淵に向けられたものなのか。そもそもかれらの目線とわれわれのまなざしとは、どうかしてひとつに交差することがあるのだろうか。

H・ヘディガー『文明に囚われた動物たち』（今泉吉晴・今泉みね子訳、思索社、1983年）によれば、動物はそれぞれの種の生息に適した一定の条件をそなえた環境、つまりその種に固有の「生活場所（ビオトープ）」にのみ棲んでいる。ひとつのビオトープはふつう複数の同じ種の個体（ないし一がい、あるいは一グループ）によって棲まわれており、それゆえ個体たちはなんらかのかたちでビオトープを分割する傾向がある。こうして分割されたビオトープの最小区画が、「なわばり」である。動物はみずから標識し防衛するなわばりに空間的にしぼりつけられている。肉食動物のなわばり内には、獲物とされる草食動物はより多く生活していなければならないから、肉食動物は草食動物にくらべてはるかに広大ななわばりをもつ。こうして一定の土地の内部には、かず多くの種が織りなすなわばりの編み目が相互にかさなりあい複雑に交叉している。これらなわばりが複雑にからまりあう異種の動物は、おたがいに無関心であったり共生関係や競合関係にであったり、さまざまである。ライオンは自分のなわばりでハイエナを発見しても、ほとんど気にとめることはないが、未知のライオンの侵入に対しては寛容ではない。とくに重要なのは「捕食者＝被食者」の関係である。草食動物にとって肉食動物は捕食者であり、敵である。この意味ではヒトは、かれらが集団で狩りをする技術を身につけて以来優位にある肉食動物として、ほとんどすべての野生動物にとってもっとも危険な共通の敵である。

ヒトは肉体的観点からすれば、外部の環境にぴったりと適合する機能環のような特殊化を知らないという点で「欠陥生物」だといわれる。人間は欠陥生物として、本能による「自然の計画」を逸脱する刺激の過剰と見とおしのつかぬ不意打ちにさらされている。だからこそ人間はこれを「注視」と「予見」によって克服し未来を切りひらくほかはないのだが、人間という種に固有のそのような環境をわれわれは「世界」と呼ぶ。人間が文化によって自然を超出したとき、そこに見いだしたのはみずから切りひらくべき環境としての「世界」であり、人間とは世界にあって未来の可能性を企てるまなざしの「主体」である。だが動物にとって視覚は、他の聴覚や嗅覚とならんで、「自然の計画」によってその環境にはめこまれ適合させられた知覚器官以上ではなく、それゆえ動物の目はまなざしではない。

動物の目はまなざしではない、ということは、われわれ人間がかれら動物と、厳密な意味で視線を交わすことはない、ということの意味する。かれらがときに、われわれ人間のビオトープやなわばりと重なり合い接するとしても、動物にとって人間はまずは異種の視覚標識であり、それゆえこれを攻撃するか逃走するか、あるいは無視するかである。だが人間にとって、世界にであ

うものはすべてたんなる視覚標識にとどまらず、みずからのまなざしが未来の可能性にむけてねらう企ての対象であり、それゆえに相手もまた自分を射抜くまなざしの主体である。原始の人間が、かれらにとって手強い相手であった動物の鋭い目を、みずからの視線を受けとめ、これと切りむすぶ一つの視線と感じたのは自然なことだったろう。人間が動物を擬人化するの、企てのまなざしとしての人間の目の本性に由来する。

ふだん動物に無関心なひとでも日光で野生のサルに食べ物をあたえたり、奈良公園でシカに煎餅をあたえ頭をなでたりしたくなる。それは、すでにひさしく文化のなかに住むものとして、もはや自分たちにはうかがいしれない自然の淵からじっとこちらを見つめる動物たちの目に魅惑されて、どうかしてかれらと視線を交わし、おそらくは自分たちの存在の深層にひそんでいるはずの、かれらとのそのかみの絆にふれてみたいという欲求につきうごかされてのことだろうか。だがわれわれの勝手な思いこみに反して、いったん食べ物があたえられることを覚えたサルどもは傍若無人にひとの手からうばい、民家に侵入する。奈良公園の餌づけされたシカにしても、近づいてくる人間が煎餅をもっているかどうか見きわめるためにこちらをじっと見つめるが、煎餅をもっていないと見るや、こちらがそれ以上近づいてもむこうへ身をかましあらぬ方へ目をやって、もはやこちらには無関心である。たとえこちらをじっと見つめるその両目がわれわれの視線と交差するように見えようとも、その目の奥にひそむ自然の闇は深く、かれらの目にわれわれは知覚標識としての他個体としか映らない。

ペットとして飼われているイヌや猫は、こちらの視線を敏感に感じとってこまやかな情感に満ちたまなざしを返してくれる、というかもしれない。だが実状はどうやら、動物たちにとって飼い主は疑似親か群れの仲間として、かれらの群れの社会順位に組みこまれており、そこにどれほどこまやかな愛情の交流が生まれるように見えても、それは人間どうしの視線の交流とは異質である。家畜のように馴化された動物の目は、人間の接近に対して鋭く反応し、闘争へとあるいは攻撃へと身構えるというのではなく、われわれの視線をそれとただ明滅しとおりするだけである。かれらが人間に無関心であること、それこそがかれらの生活の安寧の証である。動物と人間の関係は、自然と文化のあいだに横たわる深淵によって隔てられ、けっしてひとつに交わることはない。野生を超出することで孤立した種となった人間は、その孤独のうちに、人間らしいやり方で世界の存在や善悪や、そして美の意味を問うべく呪縛されているというべきだろうか。それともこれはすべて、犬と暮らすという特別な快樂を経験したことのない者の、所詮負け犬の遠吠えというべきだろうか。



## 魂の大きさ

竹下 政孝（本研究科教授・イスラム学）

昨年度の後期と本年度の前期にわたって、学部のアラビア語演習で、偽ガザリーの『来世の知識の開示に関する高貴な真珠』という小品を講読している。題名からもわかるとおり、死後の魂の運命を説いたもので、内容的には二つの部分に分かれている。最初の部分は、臨終を迎えたときから、墓に埋葬されて、墓での審問を受けるところまでが扱われており、後半は、終末の日に死者が墓から蘇り、最後の審判を受けるというエスカトロロジーの部分が扱われている。実は、イスラムの啓典である『コーラン』にはエスカトロロジーの部分は詳しく述べてられているが、人が死んでから後、最後の審判の日まで魂がどのような状態にあるかということはほとんど語られていない。この知識の空白を埋めるものは、預言者ムハンマドに帰せられる多くの言葉（ハディース）であり、また、それらのハディースをもとにした、後世の説教師や学者たちの豊かなイマジネーションであった。演習のテキストに使っている『高貴な真珠』の第一部も、この種のイマジネーションの代表的な産物である。この書の著者は原文テキストでも、英訳書でもガザリー

とされている。ガザリーは、11世紀の後半から12世紀のはじめに活躍した中世イスラム世界を代表する大思想家である。彼の主著である『宗教諸学の再生』の最後の部分も、この書と同じく、来世の問題を扱っており、またこの書でも、『宗教諸学の再生』に言及している。このように一見するとこの書はガザリーの著作に間違いのないように見えるが、この書で述べられている魂に対する考え方は、ガザリーが『宗教諸学の再生』で述べている魂の考え方と全く違うので、研究者の間では、この著作はガザリーの真作とはみとめられていない。ではどのように違うのかというと、『宗教諸学の再生』においては、魂は、非物質的実体と考えられている。つまり、魂は形も大きさもなく、場所を占めることもないので、感覚器官で捕らえられることはできず、その存在は我々の内省によってのみ知られる。それに対して、『高貴な真珠』では、魂は驚くほど物質的にとらえられている。魂は、臨終が近くなると心臓に集められ、そこから徐々にゆっくりと昇っていき、喉を通して、口から出て行く。飛んで逃げようとする魂を死の天使が捕まえる。魂は死の天使の手の中で水銀のように震える。偽ガザリーによると、このとき信仰者の魂の大きさは蜂の大きさであり、不信仰者の魂の大きさは、蝗の大きさであるという。つまり、不信仰者の魂のほうが信仰者の魂よりも大きい。天使に捕らえられた魂は、天使につれられて天上界に昇っていくが、預言者や聖者以外の魂は、天上界のどこかの地点で、追いつかれてしまう。そして、死者の湯灌が始まる頃には、魂は死体の傍に戻ってくる。湯灌が終わって、死体が経帷子に包まれると、その中に入り、死体の胸のあたりに付着し、死体とともに、墓に運ばれ埋められる。

このように死後の魂は大きさを持っていて、空間に位置を占める物質的なものと考えられているが、しかし、普通の人に見えるものではない。死後の魂を見ることが出来るのは、神によって目から覆いがとられた特別の人々だけである。そのような人々は魂を、蜂の大きさとして見るのではなく、幽霊のような生前の姿として目撃する。また、死後の魂は声を出すこともある。葬列が墓場に進んでいるときに、うなるような低い声で、「もっと早く進め」といったり、「ゆっくり進め」といったりする。また、魂はあの世で見た不思議のことがらを語り始めることもある。しかし、魂が普通の人には見えないように、魂の声も普通の人には聞こえない。聞くことができるのは、神によって特別に耳から覆いがとられた人々だけである。預言者ムハンマドは、この特別な人々の一人であり、死者から、あの世の話を聞くのを楽しんだという。普通の人々にとって死者の魂との交流の機会が夢である。夢の中に死者の魂があらわれ、霊界での様々な経験を生者に述べる。このような夢のおかげで、生者は死後の世界についてかなり詳しい情報を持つことができるのである。

## 〈書評〉西平直著『教育人間学のために』（2005年、東京大学出版会）

秋山 茂幸（本 COE 特任研究員・教育学）

これは「死生学」の本ではない。本書はいくつかの章で、「死」や「いのち」といった事柄を取り上げてはいるが、必ずしもそれが中心的なテーマではない。

では、タイトルから察するに、いわゆる「教育学」の本かということ、どうやらそうとも言えないようである。なぜか。「デス・エデュケーションとは、教育が死ぬということだ」。本書にあるこの「下手なしゃれ」がそれを象徴的に物語っている。すなわち、「もし、デス・エデュケーションが「死の教育」であり、死を教えることであるとするなら、それは、もはや「教育」を越えている。何か別のことになっている。死を教育しようとする、教育が成り立たない。教育が死ぬ」（80頁）。

「死」という問題を導入したとき、「死は教えられるか」などと問うとき、(近代)教育(学)それ自体の前提——教育とは、知る者としての先行世代が、知らぬ者としての後続世代に目的意

識的に働きかけ、知を伝達する営みである——が解体される可能性がある。逆から言えば、「学校は、初めから、死を締め出すことで成り立ったのではないか。死やら出産やら、そうした人生の不思議を扱いだすと、教師の方もよくわからなくなる」(82頁)。

著者が本書で取り上げている「人生の不思議」は、「死」や「いのち」をはじめとして「幸せ」、「経験」、「時間」といった事柄の数々であり、「教育の問いは、もはや何らかの「コスモロジー・形而上学・ミュトス・信仰」を避けては語るができない時代にある」(123頁)という。これらの事柄は最終的には語りようのない“何か”なのかもしれない、それらを巡って言葉を綴る試みは、すでにはじめから挫折を運命づけられているのかもしれない。「にもかかわらず」、著者はそれを重々承知の上で、語らないという選択をしないという道を選び取っているように思える。この道への誘いについて回るであろう本源的な問題について、以下では少しばかり綴ってみたい。

先述したように、「死」や「いのち」といった「人生の不思議」を注意深く排除することこそが、教育の存立条件である。すなわち教育が成立するためには、“何か”が語られないままでなければならない。これをさらに穿つなら、この排除・隠蔽されたものこそが、逆に教育を密かに裏支えしてきたと言えるかもしれない。ここで教育学が死生学と会うことによって、何を「持ち帰る」ことができるのかと問うてみるなら、「持ち帰る」べき場所の解体(と再構築)の可能性をこそ「持ち帰る」とでも言えるかもしれない。しかし今のところ、これまで排除されてきた「死」そして「いのち」の問題は、馴致・無害化され教育の内部に上手く回収されているように見える。近代知が、外部を設定しつつもそれらを消費するという内外の循環的・共犯的な運動によってこそ成り立っているのだとしたら、これらもその例外ではないのだろう。

一方で、死生「学」を、死の知が無意識的に伝達されていた、かつての共同体の崩壊以降に立ち上がってきた(意識的に死の知を構築・伝達しようとする)「学」であると考えたら、それは教育学と親近性があるともいえる。死の知を伝達可能なものとしなければならないという時代的要請と、死の知は伝達可能となった時点で馴致・無害化され、その本来の「おそろしさ、おぞましき」を失うということ。この二律背反的な状況において、「死と向き合う」ということの難しさを死生学は内包していると思う。この問題と本気で——死の知が馴致され教材化され消費されるのではない形で——向き合うとき、教育学も死生学も、もしかすると「学」としての存立基盤自体が揺らぐことになる。その意味で教育学と死生学の出会いは、消費される知の生産(死生学)そして伝達(教育学)をするための互いにとって「役に立つ出会い」となるか、あるいは互いが互いを解体してゆく「危険な出会い」になるか、といったような本源的な問いに向き合うことを要請してくるようになる。

しかし一方で、急いで話を反転させておかねばならない。「死」や「いのち」といった「人生の不思議」が素朴に語られてしまったとき、それを馴致・無害化された陳腐なものにすぎないとシニカルに構えてしまう態度こそが、“何か”を恐れた根源的な無害化の身振りなのではないだろうか。“何か”が日常のなかで、すでにそこにあるのに、その認識を拒否しあたかも虚構的なみかけを扱っているようなふりをするので、“何か”との出会いを永続的に先送りすること。そのような所作こそが逆に、永遠に辿り着けないと初めから想定された“何か”に対する過剰なまでの充溢への飢えを、知らぬ間に生み出しているのではないのか。「人生の不思議」には到達できないという認識こそが、到達それ自体を不可能にしている当のものではないのか。

どちらに転んでも大怪我をしかねないような危うい道を渡りつつ、「人生の不思議」と「出会い直す」こと。それを、なお教育学、死生学と呼ぶとするのなら、本書はまさに教育学の本であり、死生学の本であるといえよう。

付記：本書の著者は、本 COE プログラム事業推進担当者の一人である。また、本書には 2004 年 6 月 12 日に開催された研究集会「死生のケア・教育・文化の課題」における著者の報告(「子どもの中の性——性の理解・死の理解」)が、あらためて位置づけ直されて収められている。

## シンポジウム「生死を超えて」を終えて

末木 文美士（本研究科教授・仏教学）

DALS ニュースレター第13号でお知らせしたように、現在、人文社会系研究科を中心とした「死生学の構築」(DALS)と、駒場の総合文化研究科を中心とした「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP)の二つのCOEの協力が進められつつあるが、その第一弾として、2006年4月24日18時より、駒場キャンパス学際交流ホールにおいて、両者共催のシンポジウム「生死を超えて——ふたたび仏教を問う」が開催された。これは、昨年度UTCP主催で5回にわたり行なわれた「現代仏教セミナー」の総まとめであると同時に、新入生歓迎を兼ねて、新たな展望を示そうと意図するものであった。発表者は、現代仏教セミナーの進行役となってきた末木と小林康夫氏（総合文化研究科、UTCP）であり、ディスカッサントとして竹内整一氏（人文社会系研究科、DALS）と中島隆博氏（総合文化研究科、UTCP）が加わり、司会は門脇俊介氏（総合文化研究科、UTCP）が担当した。

末木は、新著『仏教 vs. 倫理』を手がかりに、倫理と倫理を超える超・倫理の関係について説明し、異なる価値観の調停役としての倫理の重要性とともに、

価値の根拠の理解不可能性から、倫理を超えた問題へと展開することを論じ、「生死を超える」のではなく、「生死へ超える」こと、即ち、生死を隠蔽するのではなく、それを露呈することの必要性を説いた。小林氏は、仏教学者及川真介氏のエッセー「諸行無常」考（『春秋』2005年11月号）を手がかりとして、著名な仏教研究者・僧侶で仏教の理論を十分に知っている及川氏でも、甥の不慮の死に直面して仏教の理論では何の解決もできなかったということから、仏教に何ができるか、という問いを立て、倫理に回収されない仏教のプラクシスを考えるべきであると論じた。

これに対して、竹内氏は、末木の倫理と超・倫理の区別を一応認めながらも、日常の中で両者が一体となっていることを指摘し、したがって、そこから倫理に戻ることが可能ではないかと論じた。また、中島氏は、自然死でない死者にどう対するかという供養の問題と、超・倫理的な仏教の領域が現実には顕われる戒、特に殺生戒の問題を取り上げて、仏教の可能性を問いかけた。このような発表者・ディスカッサントの議論を受けて、会場からも、自然科学研究者の立場からの発言や、新たな実践活動を展開している僧侶からの質問など、多くの問題が提起され、予定時間を大幅に超過して、20時30分過ぎに、DALS 拠点リーダー島菌進氏の挨拶で閉会した。会場は新入生から研究者・一般の方まで、100名近い参加者の熱気に包まれ、関心の高さがうかがわれた。

今回のシンポジウムに当たっては、UTCPの若手研究員の尽力とともに、DALS側からも多くの若手の方が参加し、両者の交流の場としても意義深い会であった。今後、この経験を生かし、二つのCOEがより密接に協力してプロジェクトを推進していくと同時に、人文社会系研究科と総合文化研究科の両研究科間の研究・教育面での積極的な協力に向けても資することが期待され



る。

## Nick Zangwill 博士講演研究会報告

一ノ瀬 正樹（本研究科助教授・哲学）

去る 2006 年 5 月 9 日および 10 日の二日間、東京大学文学部哲学研究室において午後 5 時より、グラスゴウ大学講師やオックスフォード大学セント・アンズ・コレッジのフェロウなどを歴任した、ニック・ザングウィル博士の講演研究会が COE 主催そして哲学会共催で開催された。ザングウィル博士は、もともとは美学なかでも音楽美学を専攻されているイギリス人研究者で、著書に *The Metaphysics of Beauty* (Cornell University Press, 2001) などがある。しかし、ザングウィル博士は、倫理学、心の哲学などの領域でも数多くの業績を残されており、今回は「死生学」プロジェクトでの講演ということで倫理学関係の話をしていただいた。筆者自身、イギリス在外研究時からザングウィル氏と知り合いであり、うれしい再会でもあった。

さて、講演第一日目は“**The Indifference Argument**”というタイトルのもと、道徳的判断と行為の動機との関係をめぐるカント以来の倫理学の中心的課題が論じられた。ザングウィル氏は、道徳的判断は本質的に行為を動機づけるとするカント流の「内在主義」と、道徳的判断と行為の動機は別個であり、行為は欲求など道徳にとって外的な要因によって動機づけられるとする「外在主義」との対立を取り上げ、外在主義的な観点のほうが説得力があるということ論証しようとした。その際、氏は、道徳的判断と動機との独立性を主張する「**the indifference argument**」をいくつかの例を挙げながら提示した。とりわけ、人を殺すことは悪いことだと道徳的に判断しながらも殺人行為を犯してしまう「傭兵」の例が印象的で、こうした実例および内在主義的な立場からの反論に対する詳細な検討を踏まえて、氏は外在主義的視点の正当性を訴えたのである。質疑の時間になると多様な質問が出た。筆者自身も質問し、内在主義的な観点というのは本来「道徳的判断によって行為を動機づけるべきだ」とする「規範」的な主張であるのに対して、外在主義は単に判断と動機との関係を人間の事実として「記述」しているものであり、両者のアプローチの仕方は質的に異なるのではないかと聞いてみた。ザングウィル氏は、規範と記述の関係についてもそう単純ではないと応じてくれた。

二日目は、“**Perpetrator Motivation: Some Reflections on the Browning/Goldhagen Debate**”と題して、第二次世界大戦中のナチによるいわゆるユダヤ人大量殺戮「ホロコースト」が主題的に論じられた。前日と比べると、歴史認識についての問題という実証的な側面を含んだ主題であり、「死生学」にまことにふさわしい議論となった。ザングウィル氏は、「ホロコースト」を理解するに当たって、ゴールドハーゲンとブラウニングとの間で近年論争となった論点を取り上げる。すなわち、ゴールドハーゲンは「反ユダヤ主義」というイデオロギーこそが多くのドイツ人を殺



戮に向かわせたのだとするのに対して、フラウニングはそうしたイデオロギーだけでなく、当時のさまざまな状況的な要素に影響されて兵士たちはあのような行為に至ったと解する。ザングウィル氏は、さまざまな証拠や証拠評価の検討を通じて、おおよそゴールドハーゲンの理解の路線を補強しようとした。質疑の時間になると、またまた多様な質問が出された。なかでも、一体誰があの大量殺戮の責任を担うべきなのかという「責任」の概念についての疑念が提起されて、議論は哲学的に深まっていった。ザングウィル氏自身も「責任」についてのさらなる論及の必要性を感じるとし、日本での戦争や戦争責任についての議論も知りたいと述べた。

以上二日間を通じて、予想した以上の密度の濃い議論の時間を私たちはもつことができた。一日目の講演後には「フォレスト本郷」において懇親会を行い、講演会に出席した人々、そしてCOE研究室の若いスタッフの方々も集い、ザングウィル氏との議論もさらに白熱したものになっていた。「死生学」プロジェクトがまたまた一歩前進したことを実感した瞬間であった。

## 駒場美術博物館特別展「聖書に生きる：トーラーの成立からユダヤ教へ」

市川 裕（本研究科教授・宗教学）

本展示会は、2006年5月26日（金）から7月23日（日）にかけて、駒場の美術博物館で開催されている。これは、イスラエル博物館（エルサレム）所蔵のユダヤ教文献資料パネルと発掘出土物の二部構成による展示を通して、聖書を生みだし、かつ聖書を生き抜いてきたユダヤ人の生活実践の跡をたどる試みである。

また、本展示は、COE研究推進との関連でいえば、伝統的な宗教研究の分野から死生学に寄与できること、そして一神教の一つであるユダヤ教の宗教生活の理解を通してキリスト教とイスラームへの理解を深めてもらうことの二つを意図しており、人文社会系の「死生学」と駒場総合文化の「共生の哲学」の二つのCOEから後援を受けている。



本展示における教育研究上の意義のひとつは、パネルに写し出されたヘブライ語の宗教民族史料群の内容に関する詳細な解説と翻訳が、本学大学院生4名によって補助冊子として作成できたことである。また、本展示が駒場キャンパスで開催されたことに鑑みて、展示に関連した講義を期間中に駒場で開講し、教育と研究を一体化させることに努めた。

本企画及び関連企画については、総合文化研究科の教員方、展示の駒場責任者として大貫隆教授、6月5日の研究セミナー「聖書はいかにしてユダヤ教の聖典となったか」の講演者として宮本久雄教授、6月24日のシンポジウム「生活の中の祈り：一神教における神との交わりの諸相」の講演者として、杉田英明教授、ゴツェフスキ助教授の協力を得た。

なお本特別展の組織は以下の通りである。

主催：東京大学文学部宗教学研究室

東京大学駒場美術博物館

後援：東京大学21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」

東京大学21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」

在日イスラエル大使館

企画協力：Mr. Khder BAIDUM（エルサレム古物商）、中村青生氏（奥羽大学非常勤講師）、

人文社会系研究科大学院生：大澤千恵子、嶋田英晴、山本伸一、志田雅宏の各氏

## Batnitzky 教授講演会

市川 裕（本研究科教授・宗教学）

テーマ：Levinas's View of Death and its Relation to Judaism

講演者：Leora F. Batnitzky（プリンストン大学宗教学科準教授）

2006年 7月21日（金）、法文1号館113教室、17:00-19:00

コメンテーター：小林康夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）

司会：市川裕（東京大学人文社会系研究科教授）

主催：東京大学 21世紀 COE「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」

共催：東京大学 21世紀 COE「共生のための国際哲学交流センター」

### 講演者紹介

**Batnitzky** 教授は、現代ユダヤ哲学を専門とする気鋭のレヴィナス研究者である。今講演会は、教授が、学術振興会の短期招聘により、「日本におけるエマニュエル・レヴィナスの受容」を主題として共同研究を実施するため、7月下旬に来日するのに合わせて実現の運びとなった。教授は、7月24～27日の4日間、東京大学人文社会系研究科・文学部において集中講義を開講し、レヴィナスを中心とした現代ユダヤ哲学を講ずる予定である。本講演は、二つの COE の両方に深く関係する主題であり、特に、レヴィナスの宗教的側面に切り込んだ内容は、日本人の研究に手薄な分野であり、大いに裨益することが期待される。

### 研究概要

スケールの大きい構想をもって、大胆に研究する態度は特に注目される。ユダヤ現代思想家、フランツ・ローゼンツヴァイク、マルチン・ブーバー、エマニュエル・レヴィナス、レオ・シュトラウスという錚々たる哲学者を、西欧近代のユダヤ教の置かれた精神状況に位置付け、ユダヤ的宗教伝統・西欧哲学的伝統・西欧キリスト教神学の相互影響の中から各自の問題意識を抽出することによって、現代ユダヤ精神の方向付けを明示できたことは特筆すべき業績である。これら4人は、西欧近代のユダヤ人解放から第1次世界大戦、アメリカへの大量移民、ナチスの台頭、ホロコースト、そしてイスラエル建国という激動の現代史を生きユダヤ思想を主導した人々に他ならない。また、ブーバーの哲学と宗教に関する著作集を監修し、エルサレムのブーバー・アルカイヴから未刊の原稿を発掘している。

### 主な研究業績

*Leo Strauss and Emmanuel Levinas: Philosophy and the Politics of Revelation*, Cambridge University Press 2005.

*Idolatry and Representation: The Philosophy of Franz Rosenzweig Reconsidered*, Princeton University Press, 2000.

“Renewing the Jewish Past: Buber on History and Truth,” *Jewish Studies Quarterly*10:4 (2003), 336-350.

“Encountering the Modern Subject in Levinas,” *Yale French Studies*, 104 (2003) special issue on “Encounters with Levinas,” edited by Thomas Trezise, 6-21.

“On the Suffering of God’s Chosen: Christian Views in Jewish Terms,” edited by Tikva

## ヴェレス教授講演会「不治の病をこえて生きる」

島蘭 進 (本 COE 拠点リーダー・宗教学)

ドイツのハイデルベルク大学で医学と心理学のはざまの領域を教えるロルフ・ヴェレス教授 (Rolf Verres) は、芸術家であり音楽療法の実践者でもある。1948 年生まれ of ヴェレス教授は、ドイツとアメリカの大学 (ミュンスター大学、ハイデルベルク大学、スタンフォード大学) で医学と心理学を学び、医師と心理療法士の双方の資格をもっている。教授はハイデルベルク大学病院などで心理療法の側面を担当し、医療の新たな可能性を切り開いてきた。死に直面したがん患者の不安と取り組んで来たヴェレス教授には『がんを超えて生きる——生きる意味の再発見』(人文書院、1999 年) などの著書があり、死生学的な問題を独自の立場から長期にわたって考察してきた学者であり、臨床家である。

ヴェレス教授の関心と活動は多岐にわたっている。民衆的サイコセラピーのフィールドワークにも関心をもち、ハイデルベルク大学の「異文化間心理学センター」を設立もしたし、同大学病院の産婦人科と協力して「子どもに恵まれない夫婦の心理相談」のプロジェクトを立ち上げるなど、幅広い活動を展開してきている。また、ピアニストとしては「火・土・水・気 ピアノ即興曲」などの CD を発表、写真家としては『パラダイス』『ハイデルベルク』などの写真集を公刊してもいる。

このヴェレス教授をお招きし、8 月 29 日 (火)、15 時～17 時半、東大法文 1 号館の 315 教室で「不治の病をこえて生きる——回復と死後へと生きる希望の可能性」と題する講演をしていただくとともに、あわせてピアノ演奏をしていただく。講演は英語で、討議は通訳つきで行う。医師であるとともに独自の心理療法家であり、死生学の実践家でもあるヴェレス教授の言葉と演奏を通して、現代人の死について、また不安について奥深い反省のひとつときを分かち合えることだろう。

## ワークショップ「死生の社会学」予告

武川 正吾 (本研究科教授・社会学)

死生に関する問題は、これまでの日本の社会学のなかで必ずしも主流の位置を占めてきたとは言えない。海外の社会学では、死生が大人気の研究テーマというわけではなかったが、それなりの研究の蓄積はあった。とくに医療現場では生と死の境界に直面することが多いことから、「死にゆくこと」(dying)をめぐり経験的研究が医療社会学のなかで積み重ねられてきた。このため日本でも海外のこうした研究の影響を受けた研究が生まれ始めている。

他方、人間の身体やその弱さに対する注目から、近年、ケアに対する社会学的研究は増え始めている。こちらは「死にゆく」過程における死生の問題というよりは、放置しておけば死に至る人間が「死にゆくこと」に逆らって、いかに「生き延びるか」ということにとまらぬ死生の問題である。高齢化による要介護者の増加や、災害による危機的状況の発生のため、今日、ケアの社会学が注目を集めつつある。

本 COE のシンポジウムやセミナーでも、これまでケアをめぐるは何人も社会学者が登場してきた。「死生のケア・教育・文化の課題」(2004 年 6 月)、「べてるに学ぶ——《おりていく》生き方」(2004 年 11 月)、「ケアと自己決定」(2005 年 11 月) 等々である。そこで、今回は、これ

まであまり顧みてこられなかった「死にゆくこと」「死そのもの」「死後」「遺された者」などに力を置きながら、死生の社会学を探究していきたいと思う。

報告者としては、副田義也氏（金城学院大学）、大岡頼光氏（中京大学）、中筋由紀子（愛知教育大学）を予定しており、討論者としては佐藤健二氏（東京大学）ほかを予定している。詳細は後日お知らせするが、現在の暫定プログラムを以下に記す、多くの諸氏の出席と討論への参加をお待ちしたい。

## 記

ワークショップ・死生の社会学  
日時：2006年10月14日（土）午後  
場所：東京大学文学部  
報告：副田義也「死の社会学」（仮）  
大岡頼光「死後の福祉」（仮）  
中筋由紀子「死の文化」（仮）  
司会：武川正吾  
討論：佐藤健二ほか

## チュービンゲン・トゥルーズ研修・研究会議

島蘭 進（本COE拠点リーダー・宗教学）

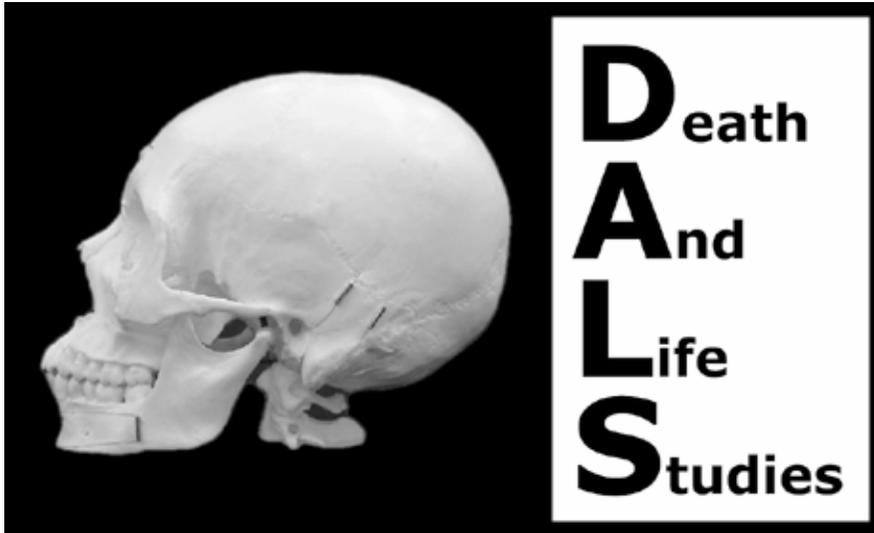
ヨーロッパの諸国ではそれぞれに死生学研究の展開が見られるが、2006年9月24日から10月4日にかけて、ドイツとフランスの研究者とともに研究会議を開き、あわせて当地の死生学関連の施設等の見学・研修を行う予定で準備を進めている。拠点リーダーの島蘭の他、多田教授、松永教授、関根教授、池澤助教授、鈴木助教授らが同行する他、特任研究員ら若手研究者、10数名が加わる。さらに現地で研究中の若手研究員も加わる。

21世紀COE死生学では、初年度の2003年3月に、イタリアのフィレンツェで最初の海外での研究会議を行ったが、今回の研修・研究会議の旅はそれに続くものであり、多くの若手研究者が加わるという点では初めての試みである。

南ドイツのチュービンゲン大学ではドイツの研究者と「日本とアジアの生命倫理」について3日間にわたって討議するとともに、日独の若手の生命倫理研究者相互の研究交流会議を計画している。また、チュービンゲン、および周辺地域でのホスピス等の死生学関係施設の訪問研修も計画されている。

南フランスのトゥルーズ大学では、2006年3月に行われたシンポジウム「死とその向こう側」を引き継ぐ内容の研究会議が行われる。多田教授が基調講演を行う他、日仏の若手研究者相互の討議の場がもうけられる。また、ここでも墓地や修道院の見学などが計画されている。

このチュービンゲン・トゥルーズ研修・研究会議の旅の計画、とりわけ若手研究者の研究交流の計画については、若手研究者自身によって立案、準備が進められており、次世代人文学としての死生学の将来への展望を切り開く試みでもある。



「DAL S ニューズレター」

第 1 4 号

平成 1 8 年 7 月 1 0 日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

2 1 世紀 COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島 蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736